



子どもから学んだこと

教師になって2年が経ちました。最低限のことはするだけで精一杯だった1年目、自分なりに少しずつ工夫できるようになった2年目。まだまだわからないことも多く、悩みながらも前向きに取り組んでいる毎日です。そんな私にとって、2年目の最後に嬉しい出来事がありました。

今年度も残り1週間という時のことです。1人の子が、小さな声で私に言いました。

「来年も先生がいいな」

私は、その言葉に驚きました。その子は昨年担任のことが大好きで、いつまでもその先生のことを引きずっているような感じがしていたからです。私に対してあまり積極的な態度をとらず、「正直、この子にとって私はあまり良い先生ではなかったのかも」と思ったりもしていました。しかし、私なりにその子ときちんと向き合ってきたつもりです。その子の良さを認め、時には厳しいことも言いました。ですから、その子が言ってくれた言葉は本当に心に響きました。表面には出さなかったけれども、私の思いはちゃんとその子に届いていたことがわかり、とても嬉しかったです。

子どもは教師をうつす鏡です。私たちが一生懸命な姿を見せれば、必ずその思いに応えてくれますが、少しでも手を抜くと、子どもたちも同じように手を抜きます。教材研究に力を入れた時は、授業で子どもの目が輝きます。そして、そのような子どもの姿が、私を元気づけ、もっとあの子たちの目を輝かせたいという気持ちにさせてくれるのです。

このように、言葉にはしませんが、子どもたちの姿は様々なことを語っています。私たちは、子どもたちの姿から、自分のやるべきことを感じ取らなければなりません。自分の足りないところ、力を注いだところ、すべての子どもたちが教えてくれます。

もうすぐ新年度が始まります。この2年目で得たことはとても大きく、私をさらに前向きな気持ちにさせてくれました。3年目は、子どもたちの小さな変化や言葉にできない思いにもっと気づき、また「来年も先生がいいな」と言ってもらえるように努力していきたいと思います。

(横須賀、小学校教員)

* 「子どもから学んだこと」は、三浦半島地区教育文化研究所4月15日付けの広報(風知草)に掲載された文です。今後、月に1回程度ホームページでも紹介いたします。